

寒冷地形談話会通信

1995年度 第4号

1995.09.01 発行

事務局：〒113 東京都文京区本郷7丁目3-1
東京大学大学院理学系研究科地理学教室内
寒冷地形談話会事務局（担当、青木）
TEL. 03-3812-2111 (EXT.4580)
FAX. 03-5684-0518 (地理学の事務室)
e-mail. kent@geogr00.geogr.s.u-tokyo.ac.jp

・夏の学校報告

前号でお知らせいたしましたとおり、8/14～16の日程で、小岩清水先生（専大附高）を案内者に、富士山の雪代跡地、大沢崩れ、大沢の砂防現場などの巡検が行われました。当日はお盆の交通渋滞に巻き込まれたものの、天候にも恵まれ、良い環境での巡検となりました。

参加者は小岩先生ほか9名の参加者があり、内、学部生が5名と、大変若い巡検でした。今後の寒冷地形を支えてくれる若手が続いてくれることを嬉しく思います。

雪代跡地では広大な面積とその破壊力に驚嘆する一方で、跡地への植物の侵入速度や生命力を実感し、野イチゴの味に舌鼓を打ちました。大沢崩れでは最上流部から扇状地域まで一通りの土砂移動経路を見学することが出来、岩樋内部を実際に歩いて見るなど、貴重な体験もしました。

巡検は勉強になるだけでなく、多くの人と知り合える場でもあると思います。来年以降も継続し、多くの方が参加されることを望みます。

・9月（今年度第2回）例会のお知らせ

今年度第2回の例会を9月9日に行います。今回は INQUA/GLOCOPH 対応委員会と共催で例会を行います。詳しい日時・場所は以下の通りです。急なお知らせですが、奮ってご参加下さい。演者には宮本真二氏（都立大・院）と青木賢人（東京大・院）を予定しています。

日時：9月9日（土曜日）、15:00～

場所：東京大学（本郷）、理学部2号館3F、311教室（地理学教室大学院講義室）

演者・演題

宮本真二氏（都立大・院）：福井県敦賀市・中池見湿原堆積物の花粉分析（仮題）

青木賢人（東京大・院）：氷河地形の近郊緯線高度による中部山岳地方における最終氷期後半の古気候復元

・今年度の会費納入のお願い

今年度の会費納入をお願いいたします。郵便局の振り込みでできます。郵便料金の値上げなど、多少支出も増加しましたが、幾分繰越金もありますので、今年度は会費は値上げせず、据え置きで行くことになりました。

寒冷地形談話会 00100-9-171342

1,500円/年 です

また、お送りいたしました封筒の宛名書きのタックシールに記載されている数字は、会費未納の年度です（93,94と記されている方は93年度、94年度および今年度が未納と言うことです）。こ

の点に関して、前号で分かりにくい表記であったためご迷惑をお掛けいたしました。申し訳ありませんでした。3年間以上、会費未納入の場合は来年度以降の会報の発送を停止することもありますので、よろしく願いいたします。

・名簿作成ご協力のお願い

名簿の作成を行うため、必ず会費の振込用紙にお名前と所属、会報発送先の郵便番号、住所、機関名、電話番号（内線番号を含む）、FAX番号を会報が届きますように正確にご記入のうえ、お振り込みくださるようお願いいたします。また、メールアドレスをお持ちの方は、それもお記入下さい。今後、寒冷地形談話会でもメイリングリストを作成し、事務連絡の簡素化を図っていきたいと思っています。「ac.jp」や「go.jp」のアドレスを持っていられる方、niftyやPC-VAN、BITNETなどの一般ネットワークでも構いませんので、必ずお知らせ下さい。

(例) 青木賢人(東京大・院) 〒113 文京区本郷7-3-1
東京大学大学院理学系研究科地理学専攻
tel. 03-3812-2111(ext.4580)
e-mail. kent@geogr00.geogr.s.u-tokyo.ac.jp

昨年度の名簿は「空欄だらけで使いにくい」というご指摘を多くの方から頂きました。今年は何とかグレードアップを図りたいと思っていますので、まだ今年度の連絡を下さっていない方はお急ぎ下さい。

・投稿のお願い

一昨年度より始まりました「山岳研究气象台」ですが、本号では清水長正さんをお願いして執筆いただきました。これまでは、事務局の方からお願いして書いていただいていたのですが、「こんなことを書いてみたい」ということがありましたら、ぜひ、ご投稿ください。事務局へのご批判やご希望でも結構ですので、会員の交流を活発にするためにも、どしどしお寄せください。お待ちしております。また、「例会でこんな話が聞きたい」というようなご要望や、巡検のお知らせなどの情報がありましたら、併せてお知らせください。なお、事務局への連絡は、題名の下に書きました住所、電話番号、FAX、e-mail などをお使いの上、お願いいたします（不在のことが多いので、電話以外の方法が良いかと思います。e-mailがbestです）。

Cand

・山岳气象台

—山岳稀少大—

岩塊流余話

清水長正（開立地研究所）

「最近では寒冷地形談話会も低調なようで…」とはちょっと耳にした某最高幹部の言だが、ものごとをとりつくりようべくことに徹すれば、こういう会は（中世以来江戸時代を生き抜いた小大名のように）つぶさない程度に存続させることもひとつの価値として満足すべきかもしれない。ただし、それにつけても例会の通知だけは的確にお願いしたいものだ。通信の内容のプライオリティはそこにあるのだから。

さて、前回の例会は、中・低山の河床堆積物と岩塊流をテーマとしており、地形学的に仕事の少ない領域であるので甚だ興味深く感じたが、都合で参加できなかったのも、以下に、最近考えている岩塊流についてのいくつかのコメント（論文には書きにくい世迷い言）を述べることにしたい。

正直のところ岩塊流という正体不明の地形が、いまさら議論の対象となるのは少しく意外のような気がした。そもそも「岩塊流」という用語そのものが、混乱をきたしやすい。本来周氷河作用による地形に対して使われていたものだが、ことばだけからは岩塊が流れて集積している地形という意味にとられることから、最近では周氷河以外の営力によるものでも岩塊流ということになってきているらしい。ただし、土石流堆積物とか火山岩屑流堆積物などのように、岩塊で構成されるものの成因が他の営力として明確なものは当然除外される。(金沢大・守屋氏の談話によると、火山学関係者の間では火山岩屑流についてもあやうく岩塊流と呼ばれそうになったが、周氷河地形の用語としてすでに使われていると説得、これを阻止し、そちらには岩屑流が採用されたとのことである)。

1970年代ぐらまでは、山間部や山麓に岩塊集積地形があれば、即座に周氷河地形とみなされることが多かったので、当否はともかく、用語の意味するところは明確だった。その後、亜高山帯以高の岩塊斜面・岩屑斜面が調査されるようになり、中・低山の岩塊集積地形については周氷河以外の可能性が述べられるようになった。この結果、成因が明確でない岩塊集積地形に対して岩塊流が無秩序に使われだした。

間違いも10年以上続けば(50年前の某独裁者や拘留中の教祖のようにウソも100回言えば)本当になる、という例えはよくないかもしれないが、こうした成因が明確でない岩塊集積地形をすべて岩塊流と呼ぶかわりに、確実に周氷河作用によって形成された岩塊流を「周氷河岩塊流」と呼び直す必要がある時期にきていると思われる。

とはいっても、日本でこれぞ「周氷河岩塊流」と呼べるものはむしろ稀で、大雪や白馬など数例が挙げられるのみであろう。有名な仙水峠の岩塊流や金峰山の岩塊斜面下方に分布する岩塊流も必ずしも周氷河岩塊流とは言えないフシもある。そこで、周氷河岩塊流以外の岩塊流について2・3述べてみよう。

地すべり性の岩塊流；桧垣氏は四国で現成地すべりによって生じた岩塊集積地形を報告した(桧垣、1992、季刊地理学)。これは地すべりの滑動により地すべり塊上に載った岩塊が細長く堆積したとされているやや特殊なものである。

このほか、気になるのが仙水峠である。仙水峠から駒津峰のルートをとらずに反対側のアサヨ側の斜面に登ってみよう。岩塊流の全貌が望めるあたりで、よく観察すると、①岩塊流は駒津峰の中腹以下に広がっている。②亜高山針葉樹林が岩塊流の中央部に波打つようなかたちで分布する。③縦断形を要約すると、上部から急(岩塊地)→緩(森林)→急(岩塊地)の下降型を示す。要するに、中央部の森林の部分を中心としたマッサがスライドし、滑落崖にあたる部分とマッサの前面部に岩塊が露出する不安定な斜面が形成された、とみなすことができよう。こうしたタイプの岩塊流は斜面の中腹以下に形成されるのが特徴で、金峰山周辺でも同様なものが観察される。

これらは基本的には、氷期の周氷河作用により岩塊が生産され斜面を覆ったものの、晩氷期から後氷期にかけての永久凍土の融解やあるいはその後の地震などによってスライドが促されたことが考えられよう。

地震による岩塊流；1月の兵庫県南部地震では地形屋の目の多くは野島断層に向けられたが、実は六甲山では、部分的に地震による崩壊が多発した。4月上旬にたまたまそれらを観察する機会を得た。谷底の森林内に崩落した径2～3mほどの岩塊があったり、一部では崩壊地の下部に舌状

の生々しい岩塊集積地形が認められるところもあった。これらは成因としては明らかに地震崩壊による崖錐である。今後、崩壊地に植生が復活し岩塊が苔におおわれれば、見かけ上立派な岩塊流ができるだろう。

土石流堆であった岩塊流；清水（1992、地理評）で模式図を紹介したが、関東山地将監峠～竜喰山南側斜面で見てきたことを紹介する。

小嶋ほか（1972、東北地理）の論文をみて、最初にここに足を踏入れたのは1980年で、小さな谷筋のいくつかで、舌状の岩塊集積地形や複数のうねのある岩塊集積地形を見て驚いた。しかし、なかには幅10m前後高さ4～5mほどの見事な舌状岩塊集積地形（礫径平均50～60cmぐらい：オープンワーク）があったが、植生にほとんど覆われず最近できたようなものもあったので、これは岩塊流ではないな、と直感した。

1982年に関東山地一帯は台風による集中豪雨に見舞われ崩壊が各所で発生した。その後に入山したところ、前述の見事な舌状岩塊集積地形は跡形もなく消え失せており、別の場所には新たな岩塊集積地形（礫径平均50cm前後：オープンワーク）が形成されていた。その場所とは小さなガリーの出口みたいなところにあたり、袋の口のように谷底が広くなるところで、古い苔のついた岩塊の上に新鮮な岩塊が載るような型で堆積していた。そこから上流側の集水域はわずかで、一般的にはそこから土石流が発生する可能性は考えにくいかもしれないが、事実は極端な集中豪雨により土石流が発生し土石流堆が形成されたことになる。この土石流堆の構成物がオープンワークであることは、細粒物質は後続流などによって堆積時にすでに洗い出しが行われていたと思われる。

いままでに紹介された岩塊流のなかには、一見土石流が起きそうにない場所に極端な集中豪雨によって土石流が発生した結果生じた土石流堆であるものが、かなりあるのではないかと考えている。前回の例会で荻谷・三枝両氏が話された小烏山山麓の岩塊流も、一部はこれにあたるものがあるのではないかとみられる。

以上のように岩塊流は、古周氷河環境の指示者としては甚だ怪しいものと言わざるをえない。ということから、すでに10年以上前に、より周氷河として認めやすい岩塊斜面や岩屑斜面が注目されたわけだ。いずれにしても、岩塊流についてとりあげる場合、前回の例会で討論されたように、まず成因・形成期を吟味することが重要であるし、岩塊がつくられるという組織地形からの視点も必要となろう。そのうえで、山地斜面からの礫生産の環境やその時期を知る一つの見方・考え方としたほうがむしろ有意義であるように思われる。

・ 尋ね人のコーナー

先日、今年度の会費を振り込まれた方で、お名前がない方がありました。こちらに送られてきました振込用紙には、東久留米市滝川に住所変更する旨の記載がありました。お心当たりの方はご連絡下さい。